

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書
〔IV〕

中山3号塚
中山4号塚
中山地蔵尊
丸山

1980

新潟県教育委員会

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

(IV)

中山3号塚
中山4号塚
中山地蔵尊
丸山

1980

新潟県教育委員会

序

信濃川が幾多の支流を合わせて水量を増し、広大な越後平野に流下するその開谷の地に位置する長岡市域は、肥沃な平野と緩やかな丘陵を合わせた豊かな土地である。この地勢を背景としたこの地域は、悠久の昔から人々の多く住むところとなり続け、ことに慶長年間堀直吉によって街並が整えられて以来、長岡市の本県中越地域における政治・経済・文化の中心都市としての役割は大きく、明治以降の発展には目をみはるものがある。

現在建設が進められている上越新幹線や北陸・関越両高速自動車道の全通は、この地域の発展の可能性を一層高めるものとなろう。また、「長岡ニュータウン」建設計画も、これらの歴史的過程を踏まえて進められてきたものと言えよう。

昭和49年、長岡市によって「長岡ニュータウン」基本構想が発表され、自然環境との調和・文化財の保護・周辺地域等に対する十分な配慮が、土地利用の基本方針としてあげられている。新潟県教育委員会はこの基本方針に沿って、ニュータウン建設区域内の埋蔵文化財の保護をはかるため、昭和51年度の遺跡分布調査を始めとして、昭和52年度に遺跡分布調査及び蛇山7号塚の発掘調査を、昭和53年度には観音山・寺屋敷・蛇山10号塚・中山1号塚及び同2号塚の諸遺跡発掘調査を実施し、いずれもその報告を公にしたところである。本年度は、中山3号塚・中山4号塚・丸山・他の発掘調査を実施したが、本書はこれらの調査報告書である。

終りに、本調査に参加された調査員はじめ地元各位・長岡市教育委員会・また計画頭初より実施に至るまで御高配をいただいた地域振興整備公団長岡都市開発事務所に対し、深く謝意を表する次第である。

昭和55年3月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

例　　言

- 1 本書は、地域振興整備公団から新潟県が委託を受け、新潟県教育委員会が昭和54年度に実施した中山3号塚・中山4号塚・中山地蔵塚・丸山の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の写真撮影・測量等は、各発掘担当職員があつた。
- 3 本書の執筆は、発掘担当職員を中心にして分担し、各項目文末に執筆者名を明記した。
- 4 遺物の実測・図版等の作成は波田野至朗学芸員があつたり、遺物の写真撮影には佐藤利之学芸員・齊藤基生学芸員の協力があつた。
- 5 長岡ニュータウン建設用地内に係る地理的・歴史的環境については、新潟県埋蔵文化財調査報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔I〕」1977年・同報告書第13「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔II〕」1978年・長岡市教育委員会「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書」1978年等に詳述されているので、本書では割愛した。
- 6 本書文中における諸氏名については、敬称を略させていただいた。
- 7 調査実施にあたり、参加者各位並びに地元の方々からあたたかい御支援・御協力をいただいた。また、地域振興整備公団長岡都市開発事務所・長岡市教育委員会から種々御配慮をいただき、長岡市西部森林組合の御協力を得た。
- 8 発掘調査及び整理に際し、次の諸氏から御助言をいただいた。（敬称略・五十音順）
尾形禮正・小島幸雄・寺崎裕助・橋本正春・廣瀬永美香

目 次

序 説

発掘調査に至る経緯	1
発掘調査体制	1

各 説

I 中山3号塚・中山4号塚・中山地蔵尊発掘調査報告

(I) 発掘調査の経過	3
(II) 位置と現状	5
(III) 構 造	6
(IV) 考 察	6
1. 塚の築造形態	
2. 中山3号塚・同4号塚の性格	
(付) 大菩薩所在中山地蔵尊周辺の発掘調査	7
1. 位 置 と 現 状	
2. 発 掘 調 査	
3. 地 蔵 尊	
4. 出 土 遺 物	
5. ま と め	

II 丸山発掘調査報告

(I) 発掘調査の経過	11
(II) 立地及び現状	13
(III) トレンチの設定と土層	13
(IV) 遺 構	14
(V) 総 括	14

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	中山3号塚・同4号塚周辺地形図	4
第3図	中山3号塚・同4号塚断面図	5
第4図	中山3号塚・同4号塚平面図、同土層図	折り込み
第5図	中山地蔵尊周辺平面図、同断面図	8
第6図	中山地蔵尊周辺出土遺物実測図	9
第7図	丸山周辺地形図・トレンチ配置図	12
第8図	丸山城跡略図	13
第9図	丸山3T・4T断面図	14

図版目次

図版I	中山3号塚・同4号塚遠景	中山3号塚・同4号塚近景
図版II	中山3号塚樹木伐採作業	中山4号塚樹木伐採作業
図版III	中山4号塚・同3号塚の削り出し状態	中山3号塚・同4号塚発掘風景
図版IV	中山3号塚・同4号塚土層状態	中山3号塚基底部
	中山4号塚・同3号塚ベルト残存状態	中山4号塚基底部
図版V	中山4号塚・同3号塚完掘状態	中山3号塚・同4号塚完掘状態
図版VI	中山地蔵尊周辺の前発掘状態(1)	同(2)
図版VII	中山地蔵尊周辺出土遺物・地蔵尊	
図版VIII	丸山遠景	
図版IX	丸山発掘状態(1)	丸山発掘風景(1)
図版X	丸山前発掘状態(2)	丸山発掘風景(2)
図版XI	丸山沢道部前発掘状態	丸山沢道部発掘状態
図版XII	丸山3T土層状態	丸山4T土層状態
図版XIII	丸山発掘終了状態(1)	同(2)
図版XIV	古道	丸山炭焼窯跡

序　　説

1 調査に至る経緯

長岡ニュータウン建設計画は、現在建設中の北陸、関越高速道路や上越新幹線など交通機関の整備を契機にしたプロジェクトであり、予定地は国鉄長岡駅から西に10kmの林や水田の広がる西山丘陵地帯に位置する。そこに合計1080haの土地を造成し商工業、住宅を整備した人口4万～5万人の都市をつくり中越地区の中核都市に長岡市を育てようという計画であり、昭和65年の完成をめざし、その完成が注目、期待されている。

公園では土地利用の基本方針として、自然環境との調和や文化財の保護及び周辺地域との関連に十分配慮することを目指しており、まず昭和49年長岡市に依頼し、文化財に関して既存データをまとめあげ、さらに埋蔵文化財については徹底を期すべく、昭和50年度、新潟県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布確認調査を要請した。これをうけ県教育委員会では、長岡市教育委員会と調査分担と体制について協議を重ね、分布調査については県教育委員会が主体となることとし昭和51・52年度の2ヶ年に渡り実施した。その後、県と市の協議により長岡ニュータウンに係る事務については県がおこなうこととなり、昭和52・53年と発掘調査を実施した。本年度の発掘調査は、昭和54年5月7日付けの公園依頼にもとづく昭和54年度分の発掘調査で、丸山城跡の確認調査・中山3号塚・中山4号塚・中山地蔵尊の4遺跡を対象とした。

2. 発　掘　調　査

発掘調査の期間および各遺跡の調査体制は下記のとおりである。

昭和54年7月9日地元区長作業員打合わせ。長岡西部森林組合刈払・伐採について協議依頼する。

昭和54年7月13日地域整備公園にて事前打合せ会。

昭和54年7月16日・17日器材搬入

昭和54年7月18日中山3・4号塚復作業、測量

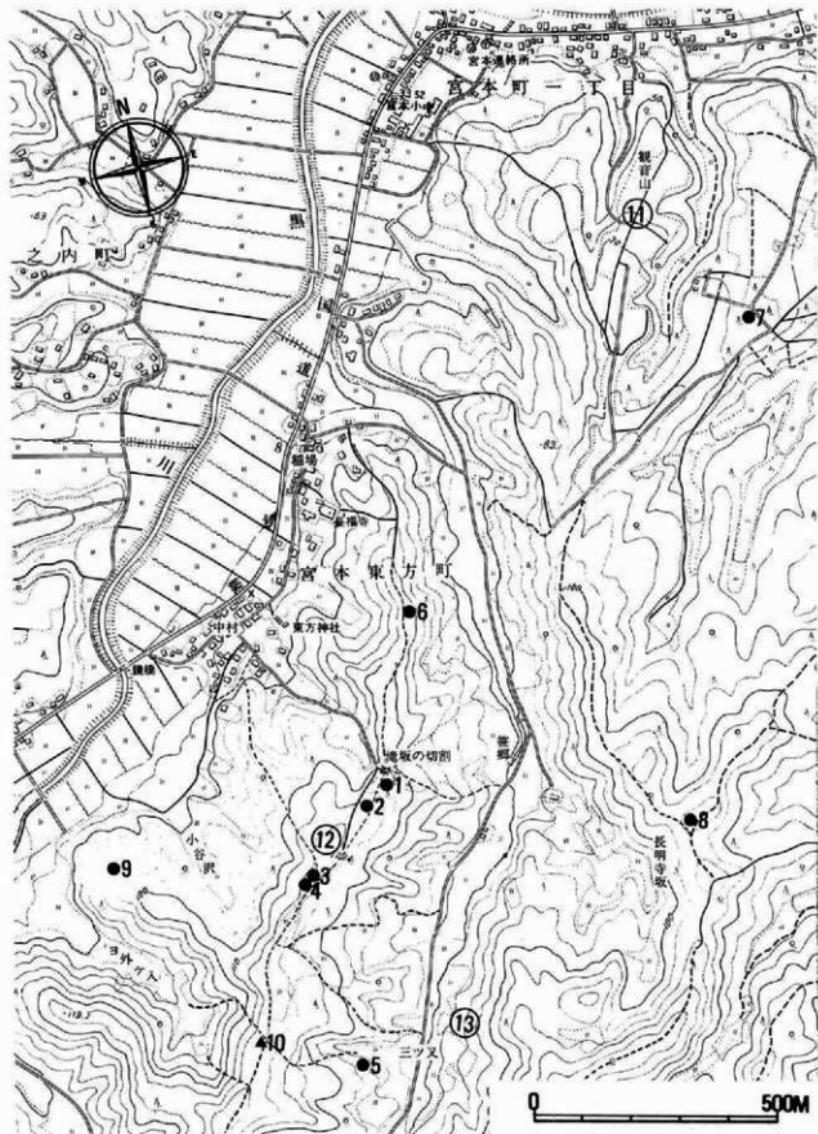
昭和54年7月20日中山3号・4号塚・地蔵尊の供養祭を大日寺住職佐藤正道を導師として実施する。

昭和54年7月20日～7月27日　中山3号塚・4号塚・中山地蔵尊発掘調査

昭和54年8月19日～8月31日　丸山城跡推定地確認調査。

(福岡嘉彰)

発掘調査	主　体	新潟県教育委員会	教育長	米山市郎(昭和54年11月10日以前)・久間健二(昭和54年11月21日以後)
	總括	文化行政課長	福島寅嘉(昭和54年10月31日以前)	・南義昌(昭和54年11月1日以後)
	管理	文化行政課長補佐	間和彦	
	調査指導	文化行政課埋蔵文化財係長	金子拓男	
	調査担当	文化行政課文化財主事	福岡嘉彰	
		文化行政課学芸員	波田野至朗	
	調査員	文化行政課学芸員	高橋　保	
		文化行政課源図記	箕輪一博	
	調査補助員	東洋大学生	黒須真次	
	庶　務	教育庁行政課副事務係長	近藤信夫	
		教育庁文化行政課主事	獅子山隆	



1. 中山1号塚, 2. 中山2号塚, 3. 中山3号塚, 4. 中山4号塚, 5. 中山5号塚, 6. 中山6号塚
7. 鈍山7号塚, 8. 鈍山10号塚, 9. 薬師堂の塚, 10. 地藏尊, 11. 觀音山遺跡, 12. 丸山, 13. 宮屋敷遺跡

第1図 遺跡位置図

I 中山3号塚・中山4号塚・中山地蔵尊発掘調査報告

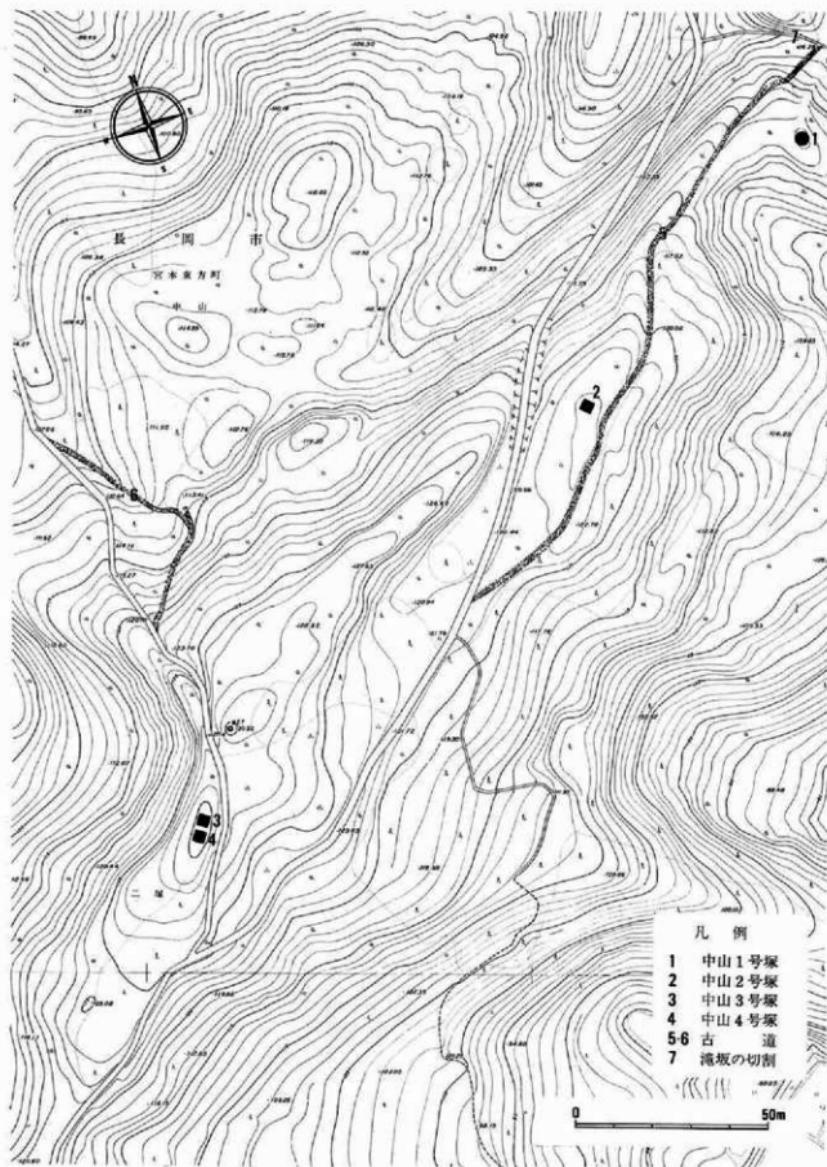
(I) 発掘調査の経過

新潟県長岡市宮本東方町字中山所在の中山3号塚・中山4号塚の発掘調査期間は、昭和54年7月16日より同年7月21日に至る12日間であった。なお、併施した通称大菩薩所在中山地蔵尊周辺の発掘調査経過については、その項に別記する。

〔発掘調査日誌抄〕

- 7月16日 発掘調査器材・用具を搬入。宮本東方町中村公民館を借用して収納する。
中山3号塚・同4号塚に至る山道は廃道化しているため草木が繁茂しており、それらも含めて塚及び周辺の樹木等の伐採を行なう。関野界平宮本東方区長来場。同氏より塚の半蔵が昭和20年代ではなかったかとの伝聞があった。
- 7月17日 樹木等の伐採作業を継続する一方で基準杭(A~H)を設定し、作業終了後発掘調査前状態の写真撮影を行なう。現場における緊急避難用仮小屋を設ける。
8月中旬に実施予定の丸山発掘調査の現地協議と合わせて、文化行政課稻岡嘉彰文化財主事・同獅子山隆主事・地域振興整備公団長岡都市開発事務所計画課川瀬茂寿氏・長岡市西部森林組合小田島賛一氏来場。
- 7月18日 中山3号塚の平面測量図を、縮尺40分の1・10cmセンターで作成する。
- 7月19日 中山4号塚の平面測量図を、縮尺40分の1・10cmセンターで作成する。
文化行政課稻岡嘉彰文化財主事来場。
- 7月20日 中山3号塚・同4号塚・通称大菩薩所在地蔵尊の供養祭を、大日寺住職佐藤正道氏を導師とし、調査員・作業員・公団側より計画課長村上修氏・同課山田敦晶氏が出席して実施する。
西半部の発掘を開始する。
- 7月21日 西半部の発掘作業を継続する一方、東半部の補足測量を行ない、測量終了後東半部も発掘を開始する。
- 7月22日 発掘作業中、突然雷雨に見舞われ、危険であったので作業を中止して下山する。
- 7月23日 基準杭AからDに至る間の西面土層図を作成するため、西半部を半蔵する。西半部は事前に削られており内部構造の有無の確認は不可能であった。東半部は耕土・抜根作業を継続する。
- 7月24日 西面土層状態の写真撮影を行なう。東半部作業を継続する。
- 7月25日 基準杭AからDに至る間の西面土層図を、縮尺40分の1で作成する。遠景写真の撮影のため西側急斜面の樹木を伐裁する。大横町熊之宮の集落が遠望でき、同集落からも2基の塚がよく見えることが知られた。
- 7月26日 発掘調査器材の整理を行なう。
- 7月27日 発掘調査終了後、遺構の有無等の再確認を行ない、全景写真を撮影する。また、完掘状態の平面図を縮尺40分の1で作成する。以上で発掘調査の全日程を終了し、同日撤収する。
- 8月26日 中山3号塚・同4号塚に係る伝承等について聞き込み調査を行なう。

（黒須真次・波田野至朗）



第2図 中山3号塚・同4号塚周辺地形図

〔II〕位置と現状

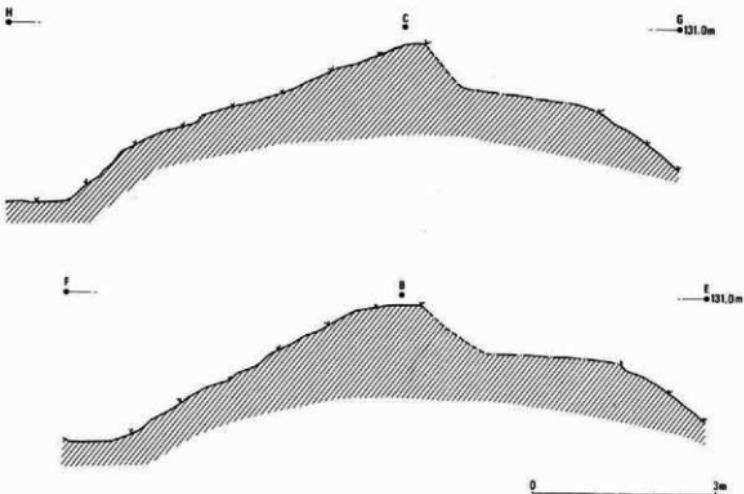
長岡ニュータウン建設用地は、信濃川左岸・長岡市域西部に位置している。中山3号塚・同4号塚は用地内の西区・八石丘陵上北部に存在しており、北方に併走している西山丘陵との間には黒川が北流している。この黒川添いに国道8号線が走っており、同線は曾地峠・米山を越えて北陸地方を縦貫する一大幹線であり、このルートは古来重要な役割を果たしてきた。2基の塚からは、眼下にこの幹線を望むことができ、逆に対岸の丘陵上及び集落から並立する塚を認めることができる。塚のあるこの丘陵尾根線上には、今は廃道と化して樹木に完全に埋もれているが、幅3尺余の山道が走っており、これから支険上・支谷を経て近隣下の集落へ通する多くの支道が設けられている。この山道が、丘陵北端の種場から南下し、滝坂の切削を経て来迎寺まで通じているといわれ、人馬の通う道であったといわれている。2基の塚は中村より支険上を登ってくる支道と本道との分歧点付近にあり、塚の東側界が道と接している。近在する中山1号塚・同2号塚・同6号塚も同様にこの山道添いに築かれている。

昭和51年度に実施した遺跡分布調査に際して確認されたこの2基の塚の現状規模は、両塚ともに径6m・高さ0.9mを測る円形塚と報ぜられた（山崎弥作 1977）。両塚ともに西半部が損壊しており、52年生の松・27年生の杉各1本の他21年生の松28本・14年生の杉3本等が植林されていた。樹木を伐採したところ、3号塚の北・4号塚の南に平坦部が認められ西側は小谷沢奥の急崖となっていた。

この2基は並存しており「ふた塚」という通称があるが、周辺集落や旧土地所有者高木家にも伝承は遺存していないかった。

なお、中山3号塚・同4号塚の地籍は、長岡市宮本東方町字中山1474番地である。

（波田野至朗）



第3図 中山4号塚・同3号塚断面図

[III] 構造

中山3号塚・同4号塚の東半部は、杉・松の植林が実施されていたにもかかわらず、構築時の状態を比較的良く留めていた。しかし西半部は削られていたため、全体の構造把握は半ば復原・推測によらざるをえなかつた。

塚は尾根幅いっぱいに築かれており、削土はそれぞれの塚の西半についてほぼ中央部まで及んでいた。このため西半部に内部造構が偏在していた場合、現段階におけるその確認は不可能といわざるをえなかつた。しかし、東半部には存在せず、頂部にも全く痕跡を認めなかつたこと、また類似した構築状態であった中山1号塚・同2号塚の例（藤巻正信他、1979）からして、この2基についても内部造構存在の可能性は極めて低いものと考えられる。

復原した規模及び外部形態は、中山3号塚が東西約7m・南北約7m・の北平担部比高約1.5m・道比高2.3mの鍾形に近い方形台状を、同4号塚が東西約6m・南北約6.5m・南平担部比高約1m・道比高約2.7mのやはり鍾形に近い方形台状を呈していた。また尾根線を東西に横断して北・中・南の3カ所に浅い溝が設けられており、この溝と東側の道、西側の急斜面によって、塚の占地範囲・平面規模が確定されていたとみられる。（第4図一上）

2基の塚をA～Dで断ち切った断面より知られた土層状態は、次の通りである。Iは、現在腐蝕が進行中の表土で砂質である。IIは、腐蝕の停滞している黒褐色砂層上で、各溝上半にのみ認められる。IIIは、IIと同様な腐蝕の停滞している黒褐色砂層で、各溝下半にのみ認められる。IVは、各塚の頂部より斜面に認められる茶褐色砂層で、Vの崩壊層と思われる。VIは、茶褐色砂層でVの漸移層である。VIIは、3号塚の北平担部・4号塚の南平担部にのみ認められる暗褐色砂層であり、VIIと同質なため、VIIの腐蝕化したものと思われる。VIIIは、基盤をなす硬質で安定した黄褐色砂層である。結局のところ、積極的に盛土と認められるものはなく、この2基の塚が地山からの削り出しによつたものであったことを示している。

なお、南・北の平担部からも遺構・遺物は全く検出されなかつた。

（波田野至朗）

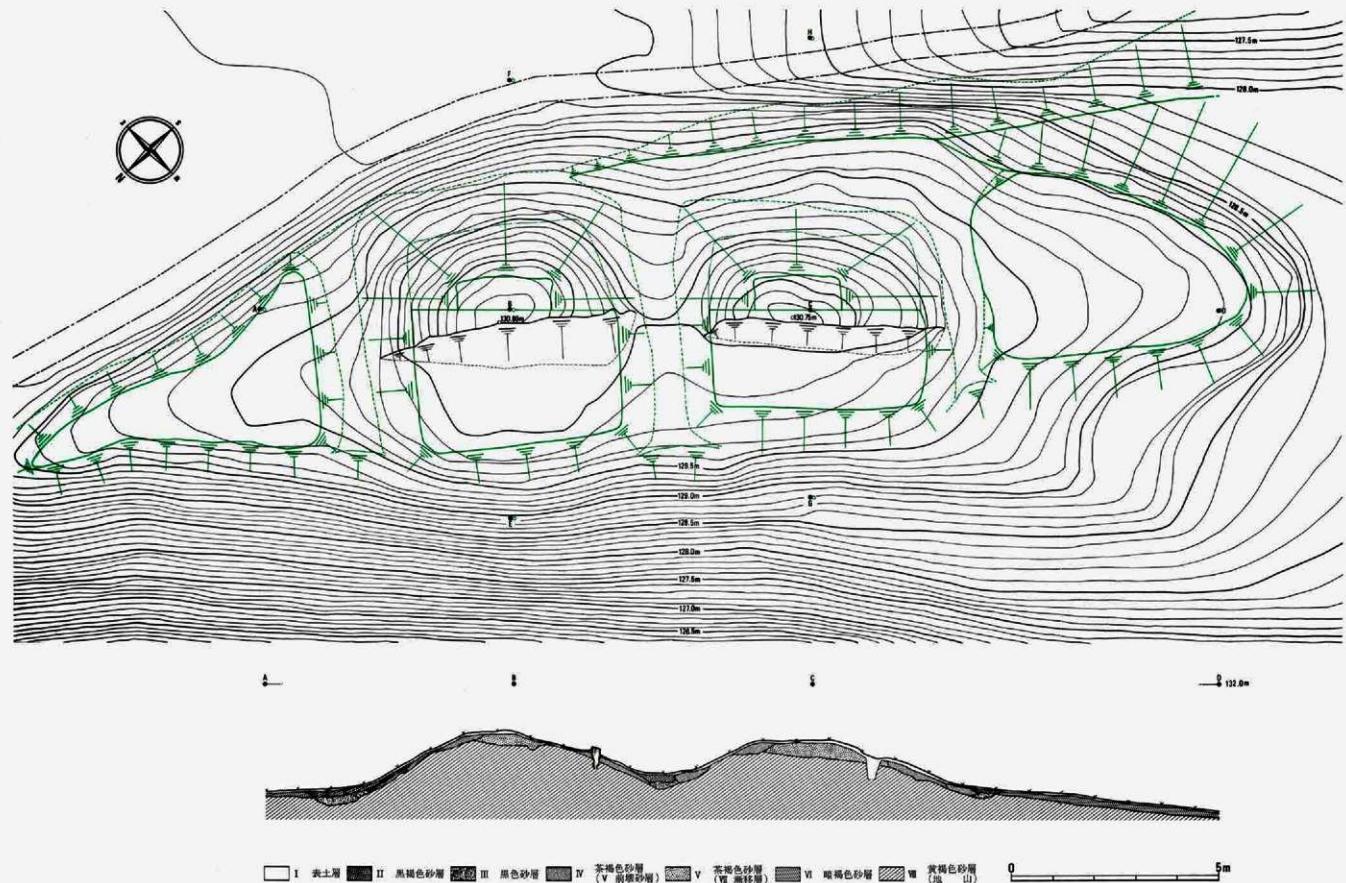
[IV] 考察

1 塚の築造形態

塚の築造形態の性格表現として「盛土遺構である塚」（金子拓男・1974）があるが今般の中山3号塚・同4号塚の調査によって、盛土によることなく地山からの全くの削り出しによってその形をなしていたことを知り、塚は盛土形態をとることが多いが總てが盛土ではないことを知り得た。塚の遺存数はきわめて多く、新潟県下に限っても、塚の遺存数は1500基余に及び（戸根与八郎・1979）、情報処理上の問題もあるので、長岡ニュータウン建設用地内における調査の終了している8基について、築造形態等を比較すると下表の如くなる。これを一覧すると、塚の築造形態には土盛り・半土盛り半削り出し・削り出しの3種類があり、塚の築造形態が立地によって左右されるものであったことが考えられる。

塚の築造が頭いかなる形態であったのかは現在決し難く、系統的な研究に待つべきものがあるが、「盛土遺構でない塚」も存在し、また「標」として「かたち」をなしているものであることは明白であるので、現段階では「標（しるし）遺構である塚」という性格表現が、より広義かつ妥当ではあるまい。

（波田野至朗）



第4图 中山3号冢·同4号冢平面图、同土层图

塚名	築造形態	立地	機能	機能	築造時代	文献
中山1号塚	半土盛り+半削り出し	丘陵尾根上突出部	円形台状	奉 載	推定中世後半～近世前半	波田野至朗
中山2号塚	半土盛り+半削り出し	丘陵尾根上	方形台状	奉 載	推定中世後半～近世前半	藤巻正信(1979)
中山3号塚	削り出し	丘陵細尾根上	方形台状	奉 載	推定中世後半～近世前半	(本文)
中山4号塚	削り出し	丘陵細尾根上	方形台状	奉 載	推定中世後半～近世前半	
中山5号塚	半土盛り+半削り出し	支丘陵上、尾根先端部	方形台状	埋 納	室町	勝形敏郎(1978)
蛇山7号塚	土盛り	丘陵性台地上平坦地	方形台状	奉 載	明治～大正	金子拓男(1978)
蛇山10号塚	土盛り	丘陵頂部平坦地	方形台状	奉 載	推定中世後半～近世前半	福岡嘉祐(1979)
座禅塚	土盛り	支丘陵上尾根先端平坦地	方形台状	?→奉 載	鎌倉～室町	寺崎裕助(1978)

2. 中山3号塚・同4号塚の性格

塚の性格は、その機能と築造の背景とによって決定できるであろう。塚の機能には大別して「物を埋納する機能（埋納機能）」と「信仰上の対象を具現する若しくは支え奉戴する機能（奉戴機能）」が考えられることを述べたことが（波田野至朗他・1979），これに基づけば、中山3号塚・同4号塚は共に奉戴機能を帯びた塚であるとることができよう。また、この2基の塚は細尾根からの削り出しによって築造されており、南・北の平坦部との位置関係から、尾根の最高部を選定したことがうかがえ、2基間に築造時期の前後関係が認められないこと、形態上・構造上に相違点が認められないことから、2基が同一の機能の意識にもとづいて築かれ、2基で単一の機能を發揮する性格のものであると考えられる。

塚は「標」として「多面観」を有する一方、直接の信仰対象としては「一面観」を有するものと考えられる。塚の正面がどちらであるか塚自体の調査から決せられる場合は多くなく、周辺の状況によって決せられる可能性が大きい。これは塚も人為的構築物であるが故に人との係わりなしには存在しないものであるところに起因している。すなわち、人が塚に対して働きかけた方向が正面と解せられるのである。中山3号塚・同4号塚の場合、築造年代を知る手がかりも含め、全く遺物が出土しなかったため、推測の域を出るものではないが、2基単一機能という観点から、東の山道側とりわけ2基の中間地点が正面であった可能性が大である。この2基には「ふた塚」という俗称以外に伝承ではなく、また発掘周辺に所任したという寺院や寺屋敷遺跡との関連性の指摘（山崎修作 1977）もあるが、現状では積極的証左に乏しい。かかる状況から、この2基の塚は、道と関連する信仰標識であったとの可能性がきわめて強いものと判断される。

(波田野至朗)

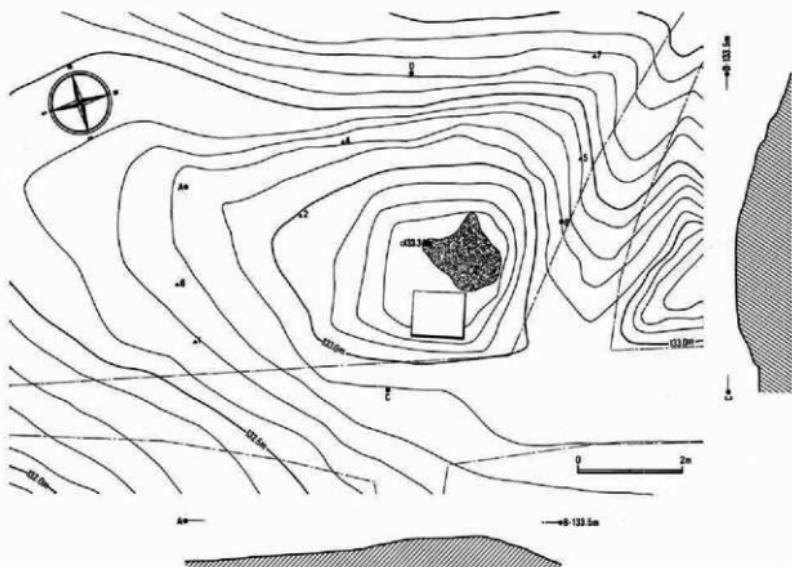
[付] 大菩薩所在中山地蔵尊周辺の発掘調査

1. 位置と現状

本地点の地名は長岡市宮本東方町字中山であるが、大菩薩と通称されている。

本地点は中山3号塚・同4号塚の南南西約300m・標高約130mに位置しており、尾根上を縱走する山道沿いにある。ここに本地点は、南北に走る尾根と西の〔ヨ外ヶ入の沢〕へ至る谷道・東の〔三ツ又〕へ通じる谷道の沢の一角であり、根回り約4m・径約1mの杉の大樹がある。地蔵尊像は、この大樹の根元に設けられたコンクリートブロック造りの小堂内に安置され、像は東面している。（第5図）

(波田野至朗)



第5図 中山地藏尊周辺平面図・断面図

2. 発掘調査

本地点の発掘調査は中山3号塚・同4号塚の発掘調査と併施し、昭和54年7月24日より27日の4日間をあてた。計画頭初は地蔵尊像の周囲4m四方程度を発掘する予定であったが、周囲の樹木を伐採したところ、一辺約3.5m・高さ約0.3mの方形台状を呈し、辻の一角に占地し、大樹があることから、何らかの聖地である可能性が考えられたので、調査範囲を拡大することにした。

(発掘調査日誌抄)

- 7月24日 中山3号塚・同4号塚より本地点に至る尾根道の草木を伐採し、交通路を確保する。
- 7月25日 地蔵尊像周辺の樹木伐採作業を実施し、この結果、発掘計画の変更を決定する。
- 7月26日 伐採範囲の拡大・現状の写真撮影後、平面図を縮尺40分の1・センター10cmで作成する。本地点の北・東は道に接し、南方は尾根沿いの緩斜面、西方は〔ヨ外ヶ入沢〕奥の急傾斜となっている。(第5図)
周辺には、径15cm前後とほぼ一定した大きさの凝灰岩製方形切石2個・安山岩製円礎1個・花崗岩製円礎1個、また腐朽した材木片が散乱しており、かつて木造の小堂が存在したことを推定させた。盤子・陶製華瓶片・陶器片・ガラス瓶・繩文土器片・石器が出土する。土層状態は全く自然層序を示し、盛土や意図的な削り出し、縄文時代の遺構等の人为的痕跡は認められなかった。
- 7月27日 土層状態の写真撮影、器材の整理を行なった後、撤収する。

(波田野至朗)

3. 地蔵尊像

安山岩製・像高50cmを測る。座型像で、右手に錫杖・左手に宝珠を持つ。刻みが全体的に浅い筋彫りであるうえ風化が顕著であるため、目鼻は不明瞭である。蓮台は同様に安山岩製で、幅35cm・奥行20cm・厚さ10cmを測り、簡略化された蓮弁が半陽刻されている。蓮台底部は固定されており、背面部の観察は事実上不可能である。像部と蓮台は一石造りではなく、像に比して蓮台が小型であるなど同時性に疑問もたれるが、製作手法の類似性・風化程度から、製作頭初からの意図的組み合わせであったかは別として、同時若しくは近接した時期には同一人によって製作されたものと考えられる。石仏には地方色の他製作者の個人差も大きく反映されるので、詳細な製作年代の割り出しが困難であり、本例も例外ではない。中世の多くの石仏の如く一面觀のみを有さないこと、簡略化の手法・風化の程度等から、江戸時代中期以前には測りえず、また明治時代を下らないものと推定されるのみである。なお、調査開始時まで赤色木綿製頭巾と前掛け・金糸縫輪袈裟を着し、造花が手向けられ、堅固な小堂に安置されていたことから、その信仰生命の下限を知りうるのである。

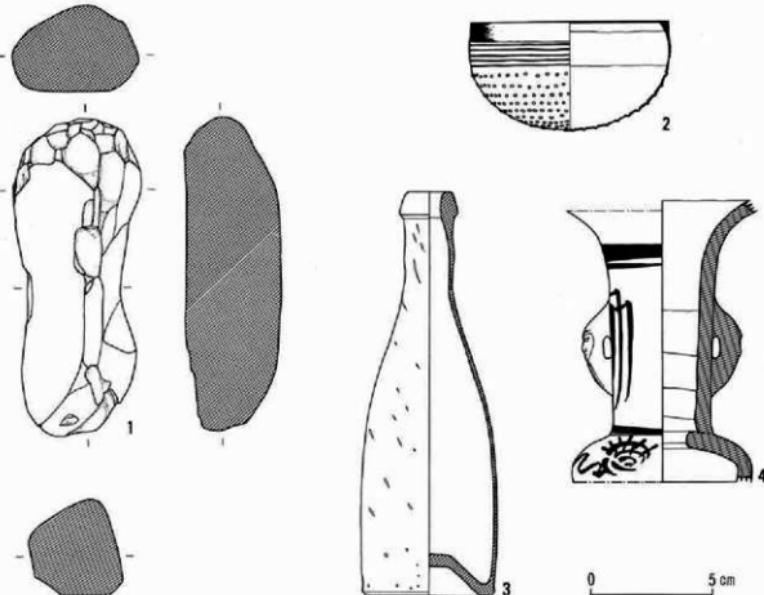
(波田圭朗)

4. 出土遺物

採集された7点のうち5点が地蔵尊像に係るもの、2点が繩文時代のものであり、何れも南・西斜面から発見された。

1 盆子 (第5図-2・第6図-2・図版VII-2)

銅製碗状梵音具。口径 8.1cm・器高 4.5cm・口唇部厚み 0.4cm・球状部厚み平均0.06cmを測る。口唇部は瓜形に内寄し



第6図 中山地蔵尊周辺出土遺物実測図

ている。内外両面に黒漆が塗布されているが、平均 0.8cm の口縁部横位削帶・その下方の 5 条の横位削縁部は地金が露出している。球状部には乳頭が口縁側より右回り螺旋状に打ち出されており、299 個を数える。ただし、乳頭の間隔は任意であり、打力も一定していない。近代のものと思われる。

2. 華瓶片（第 5 図-4・第 6 図-4・図版Ⅷ-7）

磁器製从具。口縁部・下半部を欠く。頭部中位に人面把手 2 個を付す。白色陶土を用い、把手が手づくねの他は内面に輪軸痕が明瞭である。外面及び口縁部内面に青白色釉が塗布され、稚拙ながらも赤色薙による直線・曲線の模様が手書きによって描かれている。近代以降のものであろう。

3. 陶器片（第 5 図-6・図版Ⅷ-5）

赤色陶土を用い、表面のみ灰茶褐色釉をかけ、内面に明瞭な輪軸痕を残す小片で、断面に接着材様の布着物がある。在地の窯で近世末から近代初頭に生産されたものと思われ、推定される器形は長頸胴張壺で油壺に多く用いられたものである。本来の機能を失ったものが復原されて華瓶に転用された可能性もある。

4. 磁器片（第 5 図-7・図版Ⅷ-6）

白色陶土に白色釉を用いた小片で、小型茶碗の脚部下位片と思われる。近代以降のものである。

5. ガラスピン（第 6 図-3・図版Ⅷ-3）

口径 2.0cm・底径 5.0cm・高さ 16.5cm を測る、なで肩の小型ピンである。淡い青緑色の透明ガラスで、多くのレンズ状気泡が認められる。底部はくぼみ、頭部にややふくらみがある。近代初頭の舶載品で、華瓶に転用されたものであろう。

6. 繩文土器片（第 5 図-1・図版Ⅷ-4）

底部付近の小片。所属時期・器種等は不明である。

7. 敲石（第 5 図-1・第 6 図-1・図版Ⅷ-1）

凝灰岩の棒状礫製で、打撃痕のある両端以外は自然面を残している。

（北村 光）

5. ま と め

発掘の結果、本地点の高まりは塚などの造構ではなく、自然地形と道の踏み分けにより結果的に方形状を呈するに至ったものと考えられる。しかし本地点が地蔵尊に係る聖淨な場所であることには変わりなく、その背景として地蔵信仰と道との関係が提起されるのである。地蔵尊は、地獄通・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の六道があつて迷える者を救済するとの『覺禪鈔』の記述（速水 康 1975）から、辻や路傍や峰に像を建立するようになったと思われ、これはまた『今昔物語集』等に出てくる地蔵の看病説話などと合わせて、道に迷うことなく、道中病むことのないようにとの願いの発現であると考えられる。

地蔵尊像の機能期間の上限は、その推定製作年代の上限から江戸中期とされるが、築造年代は不詳ながらも尾根道沿いに遺存する像の存在からして尾根道の開道は地蔵尊像建立以前と考えられるが、本地点で交差する支道の開削はその工法上の観察より尾根道より新しいと目され、地蔵信仰と合わせて像の建立時期と近接するものとは考えられないだろうか。

出土遺物や現状から、この地蔵尊像がごく近年まで周知の信仰対象であったことが知られるのであるが、かつての要道から山仕事用の道へと変容しながらも細々と機能してきたこの山道も、今般の長岡ニュータウン建設計画の実施にともなうこの地域の売却により、ついにその機能を停止し、本地蔵尊像の信仰標識としての役割も終息したものと考えられる。

（波田野至朗）

II 丸山発掘調査報告

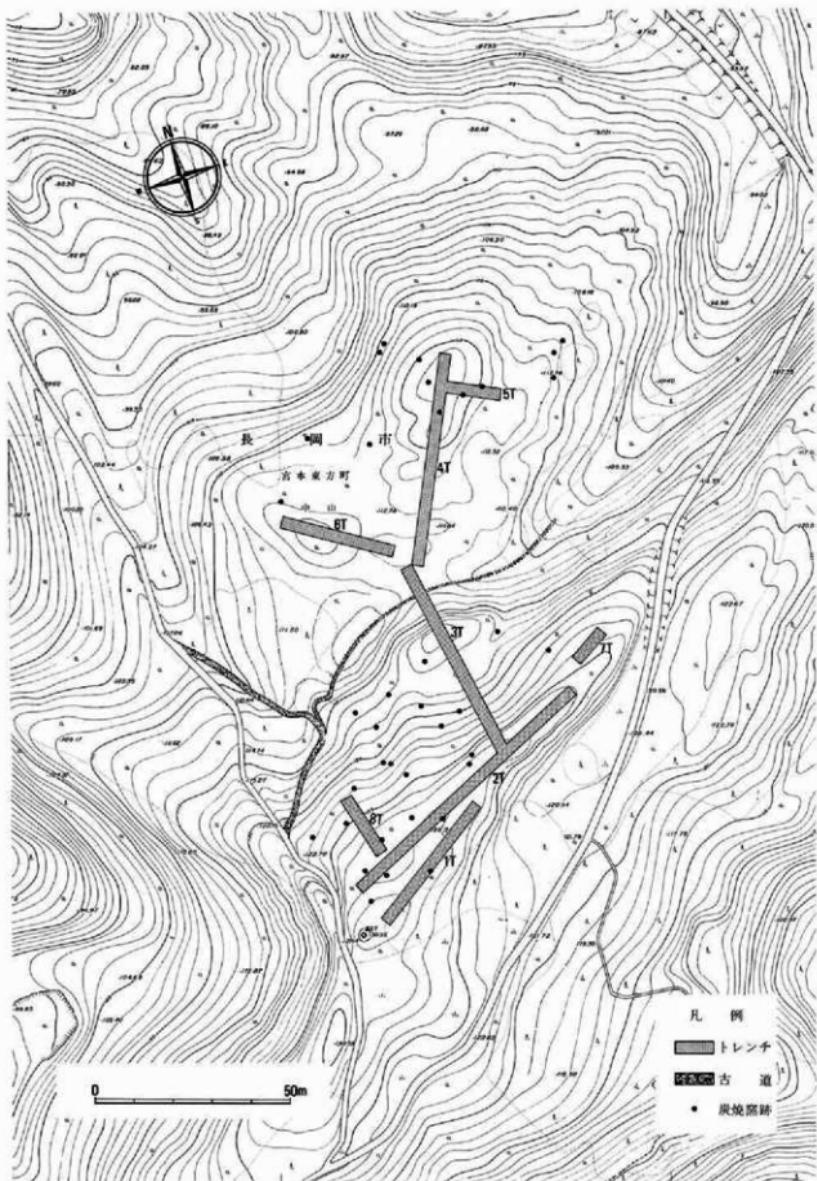
(1) 発掘調査の経過

本遺跡は昭和51年度に実施した長岡ニュータウン地内の遺跡詳細分布調査により発見されたもので、長岡市宮本東方町字中山1543・1544番地に所在する。分布調査では人工的掘り、人工的平坦地と考えられる部分も認められるが城郭と断定する確証は得られなかったために、当発掘調査により遺構確認を十分にやり、その上に立って検討すること目的とした。調査の経過は次のとおりである。

【発掘調査日誌抄】

- 7月16日 発掘調査器材・用具を搬入、宮本東方町中村公民館前に収納する。
- 7月17日 丸山城跡推定地の発掘調査に係る現地打合わせ（文化行政課獅子山主事、地域整備公団計画課川端茂寿、長岡西部森林組合小田島賛一、文化行政課福岡文化財主事）。
- 8月17日 午後1時15分、高頭町小入の地蔵尊現状確認。高木隆義氏宅にて地蔵の由来について聽取する。
- 8月18日 午前9時30分、丸山城現地伐採、刈払い後の処置について指示。トレンチ設定について波田野学芸員と協議し、5000分の一地形図にアウトラインを記す。各郭部分推定地を直線で切る様に設定することとする。
- 8月19日 第1・第2トレンチを設定。原図は地域振興整備公団平面図M-10を使用。第1T巾3m、長さ38m、第2T巾3m、長さ75m。ベンチマーク 130.32mを基準とし、単角法で設定した。
- 8月20日 8時45分作業員点呼、器材現地運び上げ。9時30分第1T発掘調査開始する。第2Tを25m延長する。第3Tを設定する。平均深度約25cm、表土下は第三紀系青灰色角礫凝灰岩を含む地山である。表土剥ぎ、抜根で第1日を終了する。（21日同作業継続する）
- 8月22日 午前中雨により作業中止。午後表土剥ぎと抜根に従事。本序連絡、周辺町内に作業員増について手配する。
- 8月23日 早朝より強雨断続するも作業実施する。第3T発掘実施、人工的掘りと推定したU字状溝は、その底部には漸移土と小凹穂が堆積しており自然の谷道、谷地の状況を呈しており城郭掘とは考えにくい。地形的にも自然の支谷上端と考えられる。第4Tを設定する。
- 8月24日 雨りのち雨、第3T清掃作業。第4T北半部、第5Tを設定。第4Tには土壠と推定される起伏が2条あり、この部分の発掘結果からは土壠であるとの確証はない。盛土、削り出しの痕跡は全く認められなかった。
- 8月25日 雨。4T、5T発掘作業。第6T開始。第6T、7T、8T設定する。
- 8月26日 第5T終了。第6T60%、500分の1スケールで炭焼窯の位置記入。セクション図作成のため各杭にレベルを測定記入。
- 8月27 第2T発掘、実測準備にかかる。写真撮影。
- 8月28日 金子埋蔵文化財係長来訪。現地調査につき討議。城と確証出来ずとの結論を得る。地域整備公団川端来訪。中央映画社記録撮影。第2T、第7T完了。第6T継続。第3T、第4T、第5Tセクション図作成。
- 8月29日 セクション図作成第一5T、第6T、第2T、第1T完了。第2T東南先端、第8T調査に入る。
- 8月30日 遺跡完掘後の全景写真撮影。発掘作業を終了する。
- 8月31日 器材を中村公民館まで降し、刀部研磨、油引きを行ない梱包荷造りを行う。地域整備公団調査終了報告を行う。
- 9月1日 作業員賃金支払い。器材撤収し上所島作業所に収納する。

（福岡嘉彰）



第7図 丸山周辺地形図・トレンチ配置図

〔II〕立地及び現状

黒川に架かる国道8号線鏡橋上から南東方向を仰ぐと、丸みを帯びた丘陵頂部が目に止まる。これが丸山と通称されている調査対象地である。

丸山は、八石丘陵の支陵である東方丘陵の頂部であり、最頂部の標高は約130mである。集落からは緩やかな山容もその頂部は細尾根であり、次段の平坦部まではかなりの急勾配である。次段部には、低い段状を連ねたふくらみがある。谷地部分は杉の植林が行なわれていたが、平坦部は雜木に覆われ一部に堀の痕跡が認められた。

この丘陵尾根上には、幅3尺余りの道が走っており、伝承等は全く不明であるが数基の塹がこの尾根上に点々と遺存しております。中山1号・2号・3号・4号・5号の各塹が、新潟県教育委員会・長岡市教育委員会により発掘調査されている。

国道8号線は、曾地岬・米山を越えて蒲原と頸城そして信濃及び北陸路を連絡する幹道であるが、現代のみならずはるか昔より要路としての役割を果たしてきた。丸山の頂部からは、眼下にこの要路を目おろし、北方はるかに小木ノ城を望み、また笛川をはさんだ南東約1.5kmの礎走丘陵上には片刈城がひかえている。この他、南西方向約1kmには中世城跡と目されている鷹射山がある。

(波田野至朗)



第8図 丸山城跡略測図

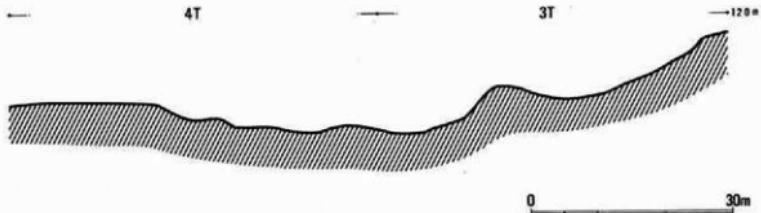
〔III〕トレンチの設定と土層

トレンチの設定に際しては、城郭造構の有無ことに空掘・郭段の確認がなされるよう配慮した。(第7図・第8図)

トレンチ(以下「T」と略す)幅は、何れも3.0mとし、1T~8Tの8本を設定した。水平長は、1T-38.0m・2T-75.0m・3T-52.0m・4T-54.5m・5T-14.0m・6T-29.5m・7T-10.0m・8T-17.0mの総計長290.0mである。しかし3Tの最大傾斜度が50°を測るなど、かなりの勾配差があり(第9図)、実際の総計長は310mを越えている。

発掘の結果、1T・2T及び5Tの表土が厚さ20cm平均であった他は5~10cm程度しかなく、表土下は直ちに地山漸移土となっていた。また3T・4Tの凹部にも溝としての顯著な堆積はみられず(図版III)、3T・4T接続部分の沢状凹部には第三期層小疊の浅い堆積がみられ、一時期流水があったことを思わせた。なお、この沢状凹部は、澁板の沢に緩やかに傾斜している。

(波田野至朗)



第9図 丸山3T・4T断面図

[VI] 遺構

調査によって知りえたものは「古道」と「炭焼窯跡」の2種類であつて、城郭遺構及び遺物は何ら検出されなかつた。

1. 古道(2カ所)

1つは、中村から丘陵上の尾根道に合流すべく南登してくる道の一部分であつて、傾斜は比較的緩やかである。これは現在でも「馬道」と呼び伝えられているもので、近年まで用いられていた「人道」と部分併走し、荷馬用とされていたものである(第7図・図版XIV-上)。戦後の荷馬消滅と共に廃道となったものと思われ、中村の丘陵登り口にも認められる。もう1つは「馬道」から分岐して滝坂の沢上に通じる細い谷道で、山仕事に供されていたものであろう(第7図)。

2. 炭焼窯跡(37カ所)

どれも円形のもので、直径約2m~4m・深さ約1.5m~2mであり、完全に埋没しきっていない。これらは、すべて同時に使用されたものではなく、1基若しくは数基づつ使用されたものと推定されるが、その年代・順序をうらづける遺物等は全く発見されていない(第7図・図版XIV-下)。なお炭焼窯跡については、戸根与八郎・家田順一郎の詳報・考察があるので参照されたい。(戸根与八郎・本間信昭・家田順一郎 1977)・(戸根与八郎 1979)

(波田野圭朗)

[V] 総括

丸山城推定地は昭和51年度に実施した、長岡ニュータウン建設計画地域一雲出地区・中央地区一の道路分布調査により発見されたものである。東方丘陵のはば中央部、主丘陵が西に張り出す支嶺線の西側斜面を黒川の沖積地に向って位置している。分布確認調査の時点では杉、ナラ、ブナ等の雜木林が繁茂しており地形観察を詳細に行なうことは非常に難しかったが、土壘状の遺構や郭と認められる平坦地、人工的意識的溝とみられる尾根の断切りなど城跡と推定できる様相が何われた。反面、城跡と断定するには不適当な一面もあることを指摘(金子拓男 1977)した上で、丸山のような未定の形態をなす山城は、この地のある時期の歴史的様相を示しているのかも知れないが、いずれにしても本跡は城郭と推定される確証がなく、今後の遺構調査を十分にやり、その上に立って検討せねばならないと判断した。

今回の調査においては、分布調査の成果及び指摘された問題点の究明に重点を置き、城の規模や範囲、及び遺構・遺物の検出確認を最大目的とした。周辺部の雜木を約1町歩、皆伐して地表からの地形観察及び全体を見通して全体で8本のトレント（以下Tと記す）を設定した。分布調査時の所見（第8図）と本調査における所見を引き合わせ、対照し記述することにする。第1Tは第8図1の標高130mの台形状を呈す主郭と推定された部分を切る様に設定した。第2Tは第7図2と3の関係を確認するために設定した。分布調査により3は北東に傾斜をもちながら細長く尾根状を呈し、東側2に接する部分で基底部1.5m高さ40cm長さ15m程の土壘状の遺構がみられるとされた地点である。1・2・3の主郭と推定されるこれら郭群の東側は30°～40°の傾斜をもち高さ5m～7mの崖状のものとなっており、明らかに人工的なものであり、東側斜手に相当する崖状をなす防禦面と考えられた。本調査では第1・2Tとも表土が平均20cmで遺構・遺物は検出されなかった。第1T北東へ20mの部分は一部深く黒色土の堆積が見られたが、明らかに東側沢口の始源と考えられる。また2と3に接するといわれた土壘状遺構とされたものは自然の地山の起伏を示していた。東側の人工的な崖状防禦面とされた部分は伐採により、明らかに人工ではあるが、杉の植林による削平部であり、中山1・2号塚の所在する尾根道の下を通り中山3・4号塚で合流し大菩薩に向う山道の開設と関連があるものと考えられた。また西側斜面部分の4・5の関係をみると第2Tと直交して西北へ第7Tを、3の先端、北東斜面に第8Tを設定したが結果は同様であった。この結果は、城跡とみると不適な一面と指摘された地形観察と一致する。つまり、1・2・3の部分の造作力が粗雑でありきれいな整地がみられないこと。地形の傾斜がそのまま残っており、通常の認識からすれば郭と呼ぶにはふさわしくない。加えて東側斜手に相当する面が防禦が十分でなく、尾根を切断する空堀がみられないという点である。第3Tは西北斜面を第8図6を切り北側崖下の崖状の凹地を確認するために設定した。6は郭というよりも土壘的なものと推定された場所で、北側は約9mの崖となっている。調査の結果は、6と5の間の崖状の凹地、崖下の空堀も明らかに自然地形の起伏によるものであり表土は地山まで5～10m程度であり、分布調査の所見の通り滝坂の沢に向って開口しており、本来の滝坂の始源と解された。6と7の凹地の第6Tと接する付近には径3～5cmの小砾、砂利が堆積し沢であることを物語っている。また、滝坂沢人為的踏分け道として利用されておりその道なりは西側の馬道（第7図）とつながっている。次に前述と対比される主要部の7・8・9の部分については、7・8は土壘状のもので郭ではなく、9は郭状の遺構を示し、平坦で8より約1m高い位置にある。9と8、8と7との間隔は天端約9～10mあり、断面V字状の掘り込みによって尾根線を切る様に連絡が断たれている。これらの堀は人工的意識的造作であると推定したが、主郭を9においていた場合は、6から9は3m程の高低があり、9から6は一望される弱點をもつていてそれを指摘し城跡としての繩張りについてのその不備を述べている。以上のことから当地点には第3Tに統けて北へ、各中心点を通る様に第4T（第9図）を設定し、さらに11の部分に第6Tを、10の平坦面との関係をみるために、第5Tを設定した。調査結果は第9図の様に自然の起伏地形であり遺構・遺物は検出されなかった。9の北側も意識的区画も認められず、自然傾斜へと続いている。10も東側に深い沢が入っており、第5Tの傾斜もそれを示していた。11も自然の起伏をもつ丘陵で人工的造作は行なわれていなかった。南側には旧畠地の歴史的痕跡が認められた。

以上の様に丸山が中世城跡という証左は得られず、関連する記録、伝承も全く確認されなかった。また西側の稻垣風の人工的とされた沢底の平坦部も、今回の調査による馬道、植林等の山仕事と係わる道路と考えられた。特に11付近の平坦部、1・2・3の西側斜面に分布する無数の炭穴群の存在は丸山の土地利用をよく示しているといえるであろう。従って確認調査により丸山は中世城跡とは考えられないとの判断に至った。

なお付記すれば、当地区が本々の繁茂するジャングル状態の中においての分布調査とであったとはい、城跡と推定される証左、反面、通常の城跡と認識するのに不適確性を有していることを指摘したことは、分布調査がいかに適切であらねばならないか、またそれにもとづいて実施される確認調査・発掘調査の方法、目的を決定する論理的背景並びに基礎的データー収集について、いかに細かい地形観察が重要であるかを示唆しているといえよう。

（稻垣高裕）

引用参考文献

- イ 稲岡嘉彰 (1979) 「蛇山10号塚発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第18「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(III)」) 新潟県教育委員会 P.P. 17~22)
- カ 金子拓男・戸根与八郎 (1974) 「川治百塚第6号塚」(埋蔵文化財緊急調査報告書第2「北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書」) 新潟県教育委員会 P.P. 20~28・30~37)
- 金子拓男 (1977) 「丸山城跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書(I)」) 新潟県教育委員会 P.P. 14~15)
- 金子拓男・竹田陽子 (1978) 「蛇山7号塚発掘調査報告」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第13「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(II)」) 新潟県教育委員会 P.P. 7~16)
- コ 駒形敏朗・寺崎裕助 (1978) 「中山5号塚発掘調査報告」(「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書」) 長岡市教育委員会 P.P. 4~19)
- チ 千葉英一 (1977) 「地蔵尊」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書(1)」) 新潟県教育委員会 P. 19)
- テ 寺崎裕助 (1978) 「座禅塚発掘調査報告」(「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書」) 長岡市教育委員会 P.P. 20~26)
- ト 戸根与八郎・本間信昭・家田順一郎 (1977) 「片田遺跡」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第9「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」) 新潟県教育委員会)
- 戸根与八郎・竹田陽子 (1979) 「狐山塚群」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第17「国道116号線埋蔵文化財発掘調査報告書」) 新潟県教育委員会 P.P. 21~23)
- 戸根与八郎 (1979) 「寺屋敷遺跡発掘調査報告」(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第18「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(III)」) 新潟県教育委員会 P.P. 11~16)
- ハ 波田野至郎・藤巻正信 (1979) 「中山1・2号塚発掘調査報告書」(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第18「長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書(III)」) 新潟県教育委員会 P.P. 23~28)
- 遠水 勝 (1975) 「地蔵信仰」 墓石房
- ヤ 山崎弥作 (1977) 「中山3号塚・4号塚」(新潟県埋蔵文化財調査報告書第10「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書(1)」) 新潟県教育委員会 P.P. 13~14)

図版 I



中山3号塚・同4号塚遠景 (W→E)



中山3号塚・同4号塚近景 (N→S)

図版 II



中山 3 号塚樹木伐採作業 (N→S)



中山 4 号塚樹木伐採作業 (S→N)

図版 III



中山 4 号塚・同 3 号塚の削り出し状態 (S E→N W)



中山 3 号塚・同 4 号塚発掘風景 (N→S)



中山 4 号塚基底部 (S→N)



中山 4 号塚・同 3 号塚ベルト断定状態 (E→W)



中山 3 号塚基底部 (N→S)



中山 3 号塚・同 4 号塚土層状態 (W→E)



中山4号塚・同3号塚完掘状態 (E→W)



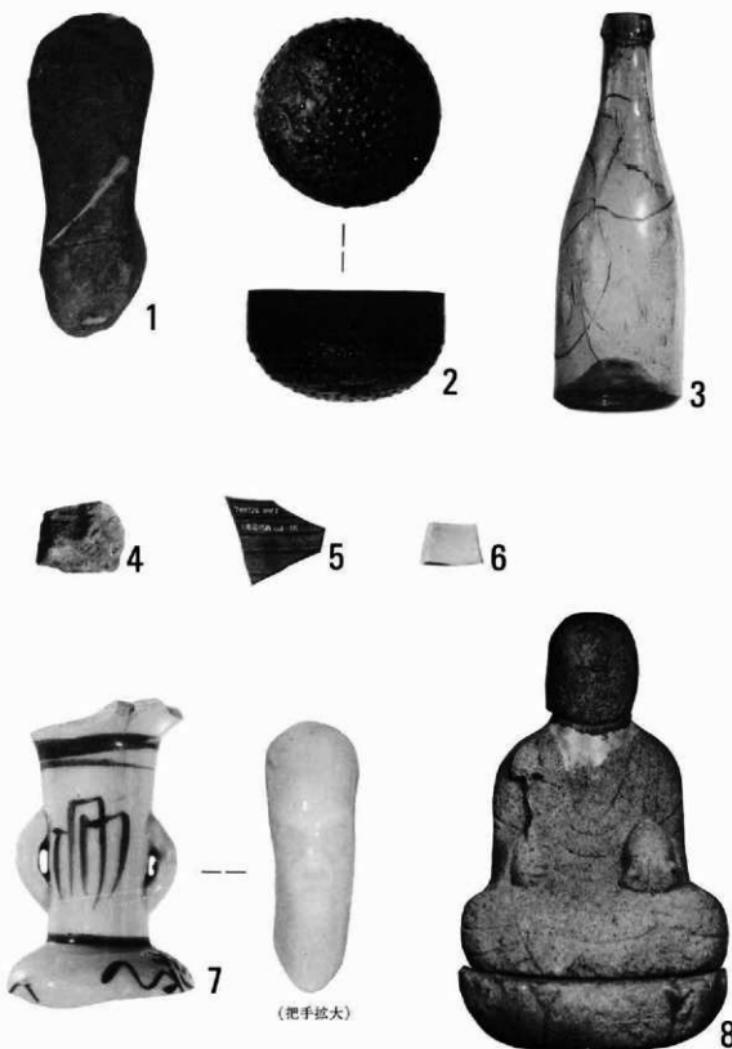
中山3号塚・同4号塚完掘状態 (N→S)



中山地蔵尊周辺の前発掘状態 (1)



中山地蔵尊周辺の前発掘状態 (2)

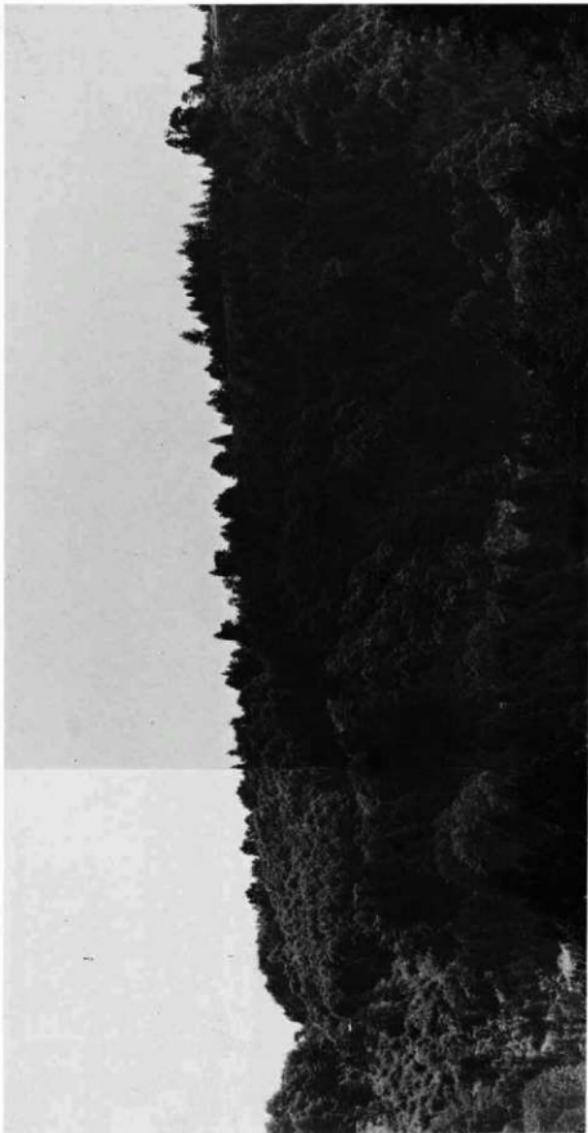


中山地藏尊周辺出土遺物・地藏尊像（地藏尊像以外縮尺）

中山 3 分割→

丸山 3 T→

被覆の切面→



丸山 遙景



丸山前堀掘状態 (1) (N→S)



丸山堀掘風景 (1) (N→S)



丸山前発掘状態 (2) (S→N)



丸山発掘風景 (2) (S→N)



九山沢道部前発掘状態 (W→E)



九山沢道部発掘状態 (W→E)



丸山 3 T 土層状態 (W→E)



丸山 4 T 土層状態 (W→E)



丸山発掘終了状態 (1) (S→N)



丸山発掘終了状態 (2) (E→W)

古道(S→N)



丸山炭焼痕跡



新潟県埋蔵文化財調査報告書第22

長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書

(IV)

昭和55年3月25日印刷

昭和55年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会
印刷 長谷川印刷